

講演要旨*

第1部：ドイツ北西部の地質，第2部：ドイツ連邦地質調査所とニーダーザクセン州地質調査所

ニーダーザクセン州地質調査所

ライナー・ヨルダン

私は科学技術庁の国際科学技術交流計画に基づき来日し、昨年6月から本年1月までの7カ月間地質調査所地質部に在籍し、日本各地の地質巡検を通じて古生物学的研究と地質学的研究に携って参りました。さらに北海道大学、東北大学、東京大学、大阪市立大学、広島大学、九州大学に専門家を、あるいは国立科学博物館や横須賀市博物館などを訪ねることができたことは全くの幸いでした。私は1月27日に帰国の途に着こうとしています。その時に当たり、ドイツの地質の一部と、西独ハノーバー市にあるドイツ連邦地質調査所とニーダーザクセン州地質調査所についてカラースライドで簡単に御説明し、日独両国の地質調査研究体制の類似点と相違点とをお話する。

日本においては地質調査所が唯一の国の地質調査研究機関であり、海外調査研究業務と国内調査研究業務とを併行して実施しているが、西ドイツにおいては海外調査研究業務を対象としてドイツ連邦地質調査所 (Bundesanstalt fuer Bodenforschung) があり、国内調査研究業務を対象としては各州に属する Schleswig-Holstein 地質調査所、Hamburg 地質調査所、Niedersaechsischen 地質調査所、Nordrhein-Westfalen 地質調査所、Hessen 地質調査所、Rheinland-Pfalz 地質調査所、Saarland 地質調査所、Baden-Wuerttemberg 地質調査所、Bayern 地質調査所がある。

西ドイツの特色としては、ハノーバー市にあるドイツ連邦地質調査所とニーダーザクセン州地質調査所とが同一の建物にあり、Prof. Dr. Richter-Bernburg が両所長を兼務し、相互に科学者の交流と研究設備の共同利用を実施しており、土壌地質の研究をも行なっている点であろう。図書室と資料室とが両立し、古生物学関係研究室が標本室と密接な関係で運営されているのも見逃せない事実であろう。所内には独特の郵便・書類の集配 System があり非常に便利であり、科学者などの時間の浪費を防いでいる。なお週5日制を採用している。ハノーバー市

の地質調査所には Training Center や Planning Department がなく、さらに研究室には走査型電子顕微鏡などもなく、早く設置してもらいたいものである。

ドイツ北西部の地質については、第四系は氷期・間氷期の堆積物により代表される。さらにデボン系、石炭系、二畳系 (Rotliegende と Zechstein に分けられ、後者は豊富に岩塩層を挟有する)、三畳系 (Buntsandstein, Muschelkalk, Keuper)、ユラ系 (Lias, Dogger, Malm)、白亜系 (Lower, Upper) については各地方の露頭のカラースライドを用いて説明した。なおユラ系については標準層序表を配布した。

御参考までにドイツ連邦地質調査所およびニーダーザクセン州地質調査所の年次報告書と出版物目録の文献名を下記する。

1. Bundesanstalt fuer Bodenforschung, Taetigkeitsbericht fuer die Haushaltsjahre 1969 und 1970, Haunover 1971.
2. Niedersaechsisches Landesamt fuer Bodenforschung, Taetigkeitsbericht ueber die Landesaufgaben 1969 und 1970, Hannover 1971.
3. Verzeichnis verkaefflicher Veroeffentlichungen der Bundesanstalt fuer Bodenforschung und des Niedersaechsischen Landesamtes fuer Bodenforschung, Hannover 1968.

(文責：地質部 神戸信和)

第15回 IUGG 総会の報告

小野 晃司

1971年モスクワで第15回国際測地学地球物理学連合 (IUGG) 総会が開かれた。私は科学技術庁国際研究集会派遣旅費によってこれに参加することができた。4年ごとに開かれるこの総会では、その会期中に IUGG 傘下の7学協会が主催するシンポジウムがあり、「海洋底拡大」を皮切りに36テーマが次々に行なわれた。最後の5日間には UMP 最終シンポジウムがあって、T. WILSON, BELOUSSOV, KENNEDY, STISHOV, RUNCORN など世界の第一級科学者の招待講演によって現代固体地球科学の先端が紹介された。IUGG によって推進された UMP の成果の大きさはこうして総括されるとまことに印象的で、IUGG・IUGS による来年度からの GDP 計画が今後の地球科学の進路をきめる上での役割をあらためて考えさ

* 昭和47年1月11日本所において開催

せられた。

私の登録した国際火山学地球内部化学協会 (IAVCEI) では、開催国ソ連の科学者がこの会議の成功に傾けた努力、なかでもカムチャッカ火山研究所所員たちが示した日本との交流への熱意は大変なものであった。カムチャッカ・千島の火山孤、シベリア東部の中生代—第三紀火成岩など、日本と似た地質環境の同地域の研究者との、これまであまりに少なかった交流の機会が、このような接触を通じて進展することがのぞまれる。「酸性火山活動」シンポジウムにはアメリカ・イギリス・大洋洲などの岩石学、とくに実験岩石学部門からの参加が少なく、その点では期待を裏切られた。しかし会期後のアルメニア共和国への巡検旅行では、これまで名のみ高く、実体がわからなかった tuff lava の片鱗を見学し (少なくとも私の見たものは)、溶結した火砕流堆積物であることがわかった。文献だけからではなく、人でも、物でも、実物にふれることがいかに有数で、必要であることか。情報伝達手段が格段に発達した現在でも、事実上の鎖国の状態にある多くの研究者達に、国際的他流試合で直接の圧力・刺激を受ける機会が1人でも多く与えられることを強くねがうのである。

(地質部)

第12回大太平洋学術会議の報告

石原 舜三

表記の会議が、太平洋科学連合結成50周年を記念して、1971年8月18～27日の10日間にわたり、キャンベラのオーストラリア国立大学で盛大に開催された。会議は大きく4つに分けられ、そのうちD部門 (太平洋地域における地質構造と鉱物資源) が地質関係で、これは下記

の5つに分けられた。

D 1 : 太平洋の構造とその発達史

D 2 : 太平洋西部地域の島孤と関連する構造

D 3 : 太平洋西部地域の大陸棚の進化

D 4 : 太平洋西部地域の鉱物資源——鉱床生成区と堆積盆

D 5 : 広域構造からみた島孤の岩石学と地球化学

D 1～3の発表論文は海洋地質の種々の内容からなるが、太平洋、とくに南西太平洋という共通の場を得て、プレートテクトニクスを中心として活発な議論が交換された。D 5は上記にとくに密接に関連するもので、従来は空白状態であった南太平洋の島孤に関する一般化学分析値や同位体測定結果が提出された。

D 4では、近年地下資源の国として著しく発展した開催国オーストラリアを反映して、多数の (31) 論文が発表された。共通テーマとして鉱床生成区の問題がプレートテクトニクスの観点から再解析され、また一般的にはオーストラリア乾燥地域の鉱体、南太平洋島孤の熱帯性鉱床などの地域性豊かな論文のほか、超苦鉄質岩に伴う鉱床その他の一般鉱床に関する講演がおこなわれ、熱心に討議された。

会議の登録参加者は1,029名に達し、多くはオーストラリアと東南アジア、南太平洋諸国であって、日本からは42名であった。北米からの参加者が一般の国際会議とくらべて少なく、かつ南米からもわずかで、オーストラリア経済圏を中心とする国際会議、が筆者の全般的な印象である。

講演論文はD 4がオーストラリア地下資源局 (BMR)、他のものはアデレード大学印刷局から1972年中に出版される。

次回の太平洋学術会議はカナダ、バンクーバー市で開催される。

(鉱床部)